オープンカレッジ

SDGs、私たちにできること

一人一人の力が世界を変える

名古屋経済大学教授
光松　佐和子

みつまつ・さわこ　衣服環境学。お茶の水女子大学大学院修士課程修了。1964年生まれ。

「誰も置き去りにしない」世界とはどのようなものであろうか。科学技術の進歩は著しく、私たちの生活は便利で快適になったが、環境や貧困の問題など地球規模で取り組むべき課題は山積している。

2015年に国連で採択されたSDGsについて、様々なシーンで目にする機会が増えた。2000年のMDGs（ミレニアム開発目標、開発途上国の貧困削減のために掲げられた）の時とは異なり、企業を巻き込んだ経済界全体の取組みが目立つ。その一方で、個人や家族、地域など小さな単位でいったい何ができるのか、目標があまりに大きすぎて無力感にさいなまれてしまう現実もある。一人の人間としてSDGsにどう取り組むことができるのか。人としての振る舞いの重要性が問われている。

授業で「SDGsについて知っているか?」とたずねたところ、多くの学生が知らなかった。世間で話題に上ってはいても、まだまだ若い世代には浸透しているとは言い難い。

啓蒙の意味を込め、フリーな形で、学生に「SDGsを身近に感じられる写真」を撮影してもらった。大学内で無駄な電気が消費されている教室、海岸に投げ捨てられたゴミ、フェアトレードの食品、プラスティックストローを使用しないドリンク、アパレルショップに設置されたリサイクルボックスなどさまざまな視点から撮影された写真が集まった。

また、ゼミではミャンマーの児童養護施設の子どもたちのために、着用しなくなったデニムを用いてデザインしたスクールバッグを作製。留学生の協力を得て、現地に届ける活動を実施した。学生たちは初めて、日本以外の国の子どもの生活を考える機会となり、文化の違いを超えて困っている人に寄り添い、手を差し伸べることの重要性を実感した。

SDGsで掲げる17の目標を自分のこととしてとらえることにより、視野が広がり、これまで見えていなかった景色に気付く。「このままではいけない」と実感し、行動することにつながる。行動すればシンプルに気持ちが良い。

近年、若い世代は自分の生活や身近な友人などの「プライベート」を大事にする一方で、公の場所や人間関係などの「パブリック」をおろそかにする風潮があるのではないか。SDGsに対する取り組みは、教育の現場において、このような気風に警鐘を鳴らす意味でも良い機会だと思う。そしてその教育は、学校だけでなく企業や家庭においても行われるべきである。

「誰も置き去りにしない」平和な世界と言ってもどこか遠くにあるのではない。

ファッション業界では2013年のバングラデシュの縫製工場倒壊事故を機に、世界的にサスティナブルに対する意識が高まっている。ただ安いものを選ぶのではなく、倫理的な価値観でモノを選ぼうという動きが大きくなった。商品を購入する際にその背景に思いを馳せること。多様性を尊重して、自分と同じように他人を大切にする生き方をすること。問題が起きても相手を理解して協力し合い、解決しようと努力すること。

これまで社会の変革は政治家や経営者など一部の人間が中心となって成し得てきたが、SDGsは誰もが取り組むことで達成できる初めての目標と言えるかもしれない。一人一人の小さな力が世界を変えると信じ、希望を持って2020年を歩みたい。

C中部経済新聞社